慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 書評：平井智尚著『「くだらない」文化を考える：ネットカルチャーの社会学』七月社、2021年 |
| Sub Title | |
| Author | 塚田, 修一(Tsukada, Shūichi) |
| Publisher | 三田社会学会 |
| Publication year | 2022 |
| Jtitle | 三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.102- 104 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0102 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書評：

平井智尚著『「くだらない」文化を考える　ネットカルチャーの社会学』

七月社、2021 年

塚田　修一

本書はネットカルチャーを分析対象とする研究書である。だが、これを先行研究のネットワークの中に位置付けるのはなかなか難しい。それは、これまでネットカルチャーが学術研究の俎上に乗せられてこなかったからである。ゆえに、まず著者が本書で繰り返し探求する問いは、「ネットカルチャーがなぜ学術的に省みられてこなかったのか」ということである。

著者が本書の序論から指摘しているように、ネットカルチャーが学術的に省みられてこなかった大きな要因は、本書タイトルの通り、それが「くだらない」「取るに足りない」ものと評価されてきたからである。実際、ネットカルチャーの中心地のひとつであった匿名掲示板「２ちゃんねる」は、常に「便所の落書き」と揶揄されていたし、２ちゃんねるのユーザー（住民）たちも、他人（あるいは自分）の書き込みについて、「チラ裏」――チラシの裏に書いておくようなくだらない文言の意――というネットスラングをよく使っていた。

ただし、本書はそのネットカルチャーの「くだらない」という評価を、頭ごなしに否定するわけではない。「くだらない」という評価を一旦は受け入れた上で、その「（くだらないとされる）ネットカルチャーはいかなる記述が可能か」を繰り返し問うのである。それによって、ネットカルチャーの「くだらなさ」を、いわば解体していく。

著者はどのようにその作業を行なっていくのか。本書の概要を紹介しておこう。

まず、著者は足場を固める（第 1 章）。参照されるのは、ヘンリー・ジェンキンズが提示する「参加型文化」である。参加型文化とは、「インターネットを介したコンテンツの生産・流通過程への広範なオーディエンスの草の根的な関与」（32 頁）のことである。

次いで本書の前半（第 2 章～第 4 章）で展開されるのは、狭義のネットカルチャー、すなわち「コンテンツ」についての考察である。ユーザーの手によるインターネット上のニュースサイトや、アマチュア動画など、ネットユーザーのコンテンツをめぐる草の根的な活動が分析されていく。

さらに後半（第 5 章～第 9 章）では、「（ネット）カルチャー」についての議論の範囲を「生活様式」へと拡大し、ソーシャルメディアの普及により変容したインターネット空間におけるネットカルチャーの位置付けに焦点が当てられる。ここでは、オンライン・コミュニティや「炎上」、ネットスラングや「ネタ」が分析の対象となる。

以上のように、本書では個別の事例を串刺しにするような理論が用いられるわけでもないし、

塚田修一「平井智尚著『「くだらない」文化を考える　ネットカルチャーの社会学』」第 27 号（2022 年 7 月）101-103 頁

またそのような一般化された理論が本書によって提示されるわけでもない（そうした指向は、早々に著者によって放棄が宣言される）。

本書で著者が選んだ戦略は、いくつもの事例検討を積み重ねることで、少しずつ、だが確実に歩みを進め、ネットカルチャー研究の地平を切り拓いていく、というものである。ただしそれは、「石橋を叩いて渡る」ものではないことを強調しておかなければならない。本書では、時として“力技”とも思える、チャレンジングな思考／試行が展開されるのである。下位文化理論との節合はその好例である。周知のように、下位文化理論は都市社会学における理論的枠組みとして提示されたものである。著者はそれをインターネット空間の分析に導入し、オンライン・コミュニティや「炎上」を考察している（第 5 章・第 6 章）。また、カイヨワによる「遊び」の議論を援用し、インターネット空間における「ネタ」の意味を分析している（第 9 章）。

こうして本書の作業は、これまで未開拓のままであったネットカルチャーの学術研究に道をつける。と同時に、ネットカルチャーに否応なくつきまとう「くだらない」という評価を解体してみせるのである。

*

評者には気になったことがある。それは、本書の記述における、ネットカルチャーおよびネット空間という対象との距離感である。著者はネットカルチャーやネット空間と、どこか一定の距離を置きながら記述を進めているように評者には見える（念のため言っておくと、それは「科学的記述における客観性」などといったものとは別の位相の事柄である）。著者は、ネットカルチャーおよびネット空間を、決して内在的に描くことはない。それらは本書では徹底して外在的に記述される。その筆致はクールであり、どこか禁欲的にすら見える。恐らくこれは著者が意識的に選び取っている距離感なのであろう。

もちろん、何よりもこれは本書の長所である。この距離感ゆえに、「くだらない」という評価が付き纏い、先行研究も乏しい――その意味で扱いづらい対象である――ネットカルチャーの記述が成功しているからである。しかし、他方でこの距離感ゆえに、ネットユーザーたちの「熱量」や、ネットカルチャーの持っている「おもしろさ」を記述しそびれているようにも思える。

著者が本書の起点として参照した、ジェンキンズ『コンヴァージェンス・カルチャー』で活写されたのは、オーディション番組の展開に夢中になったり、リアリティ・ショーの「ネタバレ」合戦に熱中したり、映画のパロディや二次創作に耽るネットユーザー＝「参加者」たちの熱量ではなかったか。また、2ちゃんねるにおける「祭り」に関する伊藤昌亮の研究では、「吉野家祭り」への参与観察に基づくエスノグラフィーによって、オフ会参加者たちのリアリティが活き活きと描き出されていた（「ネットに媒介される儀礼的パフォーマンス――2ちゃんねる・吉野家祭りをめぐるメディア人類学的研究」『マス・コミュニケーション研究』No.66）。これらは対象との柔軟な距離感による記述であり、それが見せてくれるのは、何よりネットカル

チャーの「おもしろさ」なのである。

「くだらない」の対義語は、「おもしろい」である。すでに述べたように、本書はネットカルチャーの「くだらない」という一般的な評価を解体することに成功している。さすれば、解体のその先、すなわちネットカルチャーの「おもしろさ」まで描き出す記述を期待してしまうのだ――。この評者の（勝手な）期待に万が一にでも著者が応えてくれる時が来るとすれば、そこでは著者による、新たな距離感に基づくネットカルチャーの記述が展開されているに違いない。

（つかだ　しゅういち　相模女子大学学芸学部）